

「失<sup>うしな</sup>ってこそ見<sup>み</sup>えるもの」坂<sup>さか</sup>本<sup>もと</sup>高<sup>たか</sup>広<sup>ひろ</sup>

「盲目は、不自由なれど不幸ではない」と、言う名言がある。私にもそう思える日が来るだろうか…。

私は数十年前「失明」の宣告を受けた。「網膜色素変性症」と言う目の病である。ショックだった。頭の中が真っ白になった。その後も病魔は、着実に私の網膜を蝕み続けた。毎日毎日、真綿で首を絞めつけられる思いであった。目が見えなくなったら…。「この先どうやって生きて行ったらいい…」恐ろしさと不安だけが、私の心を押しつぶそうとしていた。そんな気持ちを抱えたまま、時間だけが空しく過ぎていった。「何とかしなければ何か…」そんな焦る気持ちの中、まだ幼い子供たちの寝顔を見ていると、止めどなく熱いものが込み上げて来た。ただ一つ救いだっただけは、いつもと変わらない妻の笑顔だった。本当は妻も不安で一杯だったろうに…。そして私はすべての光を失った。「もう後戻りはできない…」「前に進まなくては…」妻の為に…いや、本当は「自分の為」であった。

文字が書けるようになった頃、また、新しい壁が私の前に現れた。それは、文字は書いてもそれを読み返す事が出来ない…。いわゆる「触読」が出来ないのである。これは、「見える」の皆さんも頭を抱えてしまった。

「ここから先は、自分で頑張るしかありませんよ」「出来る限り協力はしますから」と言われ私は、覚悟を決めた。

そうして、月日は流れ私は「見える」の皆様と共に、触読に取り組んだ。その間、「見える」の皆様は、常に私のそばにいて励ましの言葉を送り続けてくれました。その甲斐あって、私は何とか触読が出来るようになった。「見える」の皆様は、我が事のように喜んでくれました。その時の感動は、今でもはつきりと覚えています。その後も勿論「見える」の皆様との交流は、続いています。最近はお互いに高齢となり、交流もめつきり少なくなりましたが、私に立ち直りのきっかけを作ってくれた「見える」の皆様方には、心から感謝申し上げます。

そして、また、私に新しい出会いが…当時、私たちは、最も身近な情報源である町の広報誌をみんなに…と模索中であった。あるとき友人に誘われて「朗読会」に参加した。これが朗読ボランティア「トルバドール」との出会いであった。私はこの朗読会が、終わるとすぐにメンバーの人に面会を求めた。皆さんは快く応じてくれました。そこで私は、

まず立ち直りのきっかけを作ってくれたのは、「見える」と言う点訳ボランティアの皆様であった。この社会の中で、障がいをもつ者にとって一番の理解者はボランティアの皆様ではないでしょうか。この、「見える」と言う名称は、この会を立ち上げた3人の方の頭文字を取ったもので、視覚障がい者と共に正に、「レール」のごとく一緒に歩いて行こうという趣旨の下に付けられたそうです。

見える 平仮名 レール 線路

実際に、いいネーミングだとつくづく感心しました。ここから私の「第2の人生」が、スタートしたといっても過言ではない。この頃の私は、点字の事についてはほとんどと言っていいほど、分かりませんでした。そんな私に一人から懇切丁寧に教えていただきました。

「あいうえお…」「12345…」「ABCDE…」一文字一文字を確実に書く事…一つの点の大事さ…など時には優しく、時には厳しく教えて頂きました。そして、何とか

「広報誌」の事を相談してみた。当時はまだ読み手が少なく一本のテープを回し読みしていました。情報というものは、「正確な事。分かりやすい事。そして、出来るだけ早い事」が、求められます。このことからすると、私たちの現状は、「早さ」という面ではほど遠いものであった。ひどい時は最後の人が聞く頃にはすでに月が替わっていることもしばしばでした。「トルバドール」の皆様は、これを聞いて「出来るだけ協力は惜しまない」と言ってくれました。それから忙しい合間をぬって協議を重ねついに広報誌の配布にこぎつけた。読み手は「トルバドール」の皆様を担当してもらい、これを町の社会福祉協議会で編集発送してもらった。これにより私たちは、今までより格段の速さで「広報誌」を聞けるようになった。しかし、各人の家で録音する為に、録音レベルや読む速さなどまちまちであった。でも私たちにとってそんな事は問題ではなかった。より正確により早く情報を入手出来るのが嬉しかった。

その後も「トルバドール」の皆様とは、何度も協議を重ね「より聞きやすくする」為に、努力を重ねて頂きました。時には雑音を入れない為に夜中に録音したり、遠くから録音室に通ったりもしてくれました。本当に頭の下がる思いです。

そして、近年訪れた「デジタル化の波」は、「トルバドール

ル」の皆様にとって、また「新しい壁」となった。「今さらパソコンなんて…」「私には、無理かも…」そんな声もちらほら…。しかし、「トルバドール」の皆様は、そこで諦めることはしなかった。見事この「新しい壁」を乗り越え、私達に「デイジー」(デジタル録音)を提供して頂いておられます。この「新しい壁」を乗り越えるため皆様のご苦労、ご努力は言うまでもありません。お陰様で、このデイジーにより「よりクリアな音声」で「リアルタイム」に、この情報を楽しむ事が出来ています。

私たち障がいをもつ者にとってより多くの人達に自分達の事を理解して貰う為には、このボランティアの方々の大きな力を借りることも大事だと思いますが、何より私達自身が広く社会の中に溶け込んで行く事が大切ではないでしょうか。これからも、沢山の「出会い ふれあい」を重ねつつより大きな「心の輪」が広がって行く事を心から願っています。そして、今私は「失ってこそ見えるもの」とは、人のやさしさ… あたたかさ… そういった「心の灯り」だったのだと思っています。

# 障害者ってなんだろう

しょうがいしゃ

土屋美貴

「障害者ってなんだろうね。」

ふと、友達の口から出た言葉だった。私はその言葉の意味を理解するまで、時間はかからなかった。障害者と言っても、種類や程度は十人十色であり、決してひとくくりにできないものだと思う。身体障害、知的障害、精神障害、様々な障害がある、そんなことを頭の中で考えていると、友達は続けて口を開き、

「私さ、パニック障害なんだよね。」

私は何故か、一瞬周りの音が聞こえなくなった。友達と知り合って数年経つが私は数秒前まで、友達のことは健常者だと思っていた。パニック障害とは、突然動悸に襲われたり、めまいや発汗、震えや吐き気など発作を起こし、私生活に支障が出ている状態をパニック障害という。パニック障害を詳しく理解していることもなく、返す言葉に迷っている、

「最初は自分が変なのか、とか色々考えちゃったけど、周

視覚障害者の方の行動が止まった。その瞬間私は不安と恐怖が混ざり合わさった。そして私はとても長い時間のようにも感じた。

「ありがとう、でも大丈夫ですよ。」

その言葉で我に返り、同時に暗闇から抜け出した。私は何に迷っていたのだろう、悩んでいたのだろう。たった一言だけど、障害者の方と交わした言葉で心があたたかくなった。

障害者、世間一般的に心身に障害を抱えていて、他者からの支援を受けなければ日常生活に支障をきたすおそれのある人のこと。反対的言葉として、特定の疾患などを抱えておらず日常生活にも支障のない人のことを、健常者と呼んでいる。この二つの言葉を並べてみた時、繊細で細くとても頑丈な糸のような境が私には見えた。人間は初対面の人に対して見た目からどうしても判断しやすい。車いすに乗っている、手話で話している、片方の手や脚が無い、私が見えなかった白杖を持った人も見た目から障害者と判断した。パニック障害や、精神的疾患など見た目では判断できない障害を持った人も世界にはたくさんいる。見た目で判断する、時にいい意味で捉えることもできるが、いじめや虐待など時には悪い方向にいつてしまうこともある。

「ありがとう。」

りに話すことで少し楽になったんだよね。」

言葉と同時に友達が笑顔になった。その瞬間と同時に私自身も笑顔になった。

言葉は凄く、何も無い何も見えない暗闇から一瞬で、暖かい陽が差す場所へ導いてくれる。

ある日、電車を待っていると視覚障害者の方が白杖を動かしながらホームを歩いて来た。自分がぶつかってはいけないと身体を避けたが、そのまま他の人にぶつかってしまった。

「私が一言声をかけていれば……。」

そんなことを思いながら一週間が過ぎ、また同じ場所での間の視覚障害者の方が歩いてきた。今日はやけにホームが混んでいたため、気が付く人が付く人たちは、身体を避けた。イヤホンを付けながら携帯に夢中になっている人がいた。私はとっさに声が出た。

「もしよろしければ案内しましょうか。」

たった一言だけお互い心がぼっとあたたかくなる言葉。障害者の方に声をかけるのは、少し勇気があるし不安にもなる。けれど、その一歩を踏み出せばお互い住みやすく、居心地の良い世界になると思う。

「障害者ってなんだろう。」

同じ人間、言葉を交わし心の輪を広げ差別や偏見のない世の中に少しでもなっていけばいいなと私は思う。

わかってもらおう努力<sup>どりよく</sup>濱<sup>はま</sup> 口<sup>ぐち</sup> 聡<sup>さとしる</sup>

僕の障害は脳性まひ。生まれた時から障害と向き合ってきました。障害があることで、たくさんを経験できました。僕は福祉の制度を利用して、いろんな人と関わってきました。

僕は小学校に行く前からずっと、リハビリに通っていました。早退してリハビリに通い続けても、思うように動けるようにならないし、友達と遊ぶ時間が取れたかったので、リハビリに通うのがイヤでした。「周りの友達は歩けるのに、なんで僕だけ歩けないのだろう。」そう思いながら、小学校の時にリハビリに行く回数を減らしました。

身体を動かす機会が減ると、どんどん硬くなっていくばかりです。いよいよ高一の時に、股関節の周りが痛くなり座れなくなってしまいました。病院の先生に相談すると、自宅に来てくれる訪問リハビリを紹介されました。

訪問リハビリを受けるようになってから、股関節の痛みは軽減されました。リハビリの大切さを感じ、あれだけ嫌

る機会になると思いました。

僕が話した言葉を一文字一文字打ち込んでもらって、パワーポイントにしました。当日は聞こえにくいかも知れないけれども、自分の言葉で話しました。聞こえにくい人のために、パワーポイントを表示してもらって、同じことを言いました。内容は、脳性まひで介助される人の気持ちについてです。体のコンディションによって、食べにくさや飲み込みにくさがあること。姿勢でしんどさが変わることで、身体がこわばったらしゃべりにくくなること。いつも周りにわかってほしいと思っていたことを話しました。

いつも、介助してくれる人に伝えたいと思いながら、伝わりにくいことがたくさんあって、僕も相手もなんとかしたいのにできないことを話そうと思ったんです。僕はこれまでお母さんとか、特定の誰かに頼っていたので、その誰かが僕のことを説明してくれていました。自分で自分のしんどさを話したのは、高校生で発表したこの時が初めてでした。

発表して気付いたことがあります。今までヘルパーさんなど介助する人が上手じゃないと思っていましたが、僕もされて嫌なことを自分の言葉で伝えていなかったんです。僕のことを聞いてくれると思っていなかった…他人を心から信頼してお願いできなかった自分に気が付きました。家

だったリハビリを受けたいと思うようになりました。訪問リハの先生とも家で困っていることや学校での姿勢設定を相談するようになりました。今でも自発的にいろんな相談をしています。

高校からは身体のことを考えて、支援学校に入りました。高校では自分に合わせた学習支援を相談できました。生徒会や文化祭を楽しむことができました。

ある時、リハビリの先生に『西宮で福祉用具展をするから自分のことを話してみないか』と聞かれました。三十人の前で講演をしてみない、という誘いを受けました。

僕はやってみたいなと思いました。僕は言語障害があるので、周りからわかっていない・喋れないんだろうと思われていました。コミュニケーションが取れないと思われるから、いつも僕ではなくお母さんに「どうですか。」と僕のことを質問されていました。障害をもつ当事者も意見を持つたり、考えたりしていることを、しっかりと伝え

族以外の誰かに「助けて」と言うことができなかったんだなと思います。しかし、訪問リハビリや支援学校での一対一の関わりを通して、ただ僕の話聞いてくれたり、僕のことをわかってほしいと思ってくれたり、気にかけてくれたりする体験があったから、どんどん相談していこうと思えるようになりました。

心の輪は「広げよう」と思って頑張るものではないと思います。長く時間がかかってもいいから、コミュニケーションをとったり、自分の近くにいる人に関心をもったり、そんな小さな気遣いや言葉かけが大切なんじゃないかなと思いました。

僕はこれからも、自分のことをわかってもらおう努力をしたいです。わかってもらえない時にイライラしてしまうことも減らしていきたいです。そしていつか、『さとるくんの介助はここが大変だから、もう少しこの部分は協力してほしいな』と気兼ねなく言ってもらえる関係を築いていきたいなと思います。

お互いに一緒にいてしんどくない関係をもてるように、僕自身も発信したり受けとめたりして、自分を振り返りながら成長したいと思います。